

# 初期須恵器窯の系譜について

— 大蓮寺窯跡を中心にして —

植 野 浩 三

はじめに

日本における初期須恵器の窯跡は、近年各地で確認されている。かつて初期須恵器の窯跡は、陶邑古窯址群（以下陶邑窯とする）・一須賀窯跡に限定されていたことから、田辺昭三氏は「日本で須恵器生産が開始されたときから、地方窯が成立するまでの最初の数十年間、須恵器は陶邑とその周辺から、一元的に供給されていたということができ<sup>1)</sup>」とした。しかし、その後の調査が進展していくなかで、数多くの初期須恵器の段階の地方の窯跡が発見され（図一）、矛盾が生じてきたのである。

その矛盾点は、第一に地方窯成立の時期がさかのぼる点である。第二には、北部九州に見られるような、陶邑窯とは異系譜と考えられる窯跡の存在が明らかになったことである。こうした点から、地方窯の成立は、これまでのように全てが陶邑窯を経由することなく、朝鮮半

島から直接的に渡来した工人によって生産が開始され、日本における須恵器生産が「多元的」に行われたとする、いわゆる「多元論」の提唱が行われた。

筆者はかつて、「初期須恵器窯の解釈をめぐって」と題して、この「多元論」の整理を行い、陶邑窯と系譜を異にするといわれていた窯跡の検討を行った<sup>2)</sup>。それは、各報告者が系譜の違いの根拠として強調している陶邑窯との相違点について、逆に共通点を重視する必要性を述べ、陶邑窯内での型式変遷の範囲で把握出来る点を指摘し、必ずしも北部九州を除く他の一群は、陶邑窯と異系譜とは断定出来ないと言うものであり、陶邑窯からの影響を再考する必要性を説いた。特にここでは、愛知県東山一一一号窯跡、東山二一八一（四八）号窯跡を例にあげ比較検討を行ったが、他の窯跡については十分な検討を行う余裕がなかった。従って、小稿では、同様な点について、宮城県大蓮寺窯跡に焦点を当てて、系譜の問題を再検討することを目的とする。

尚、小稿で使用する初期須恵器の名称、および「多元論」の現状・

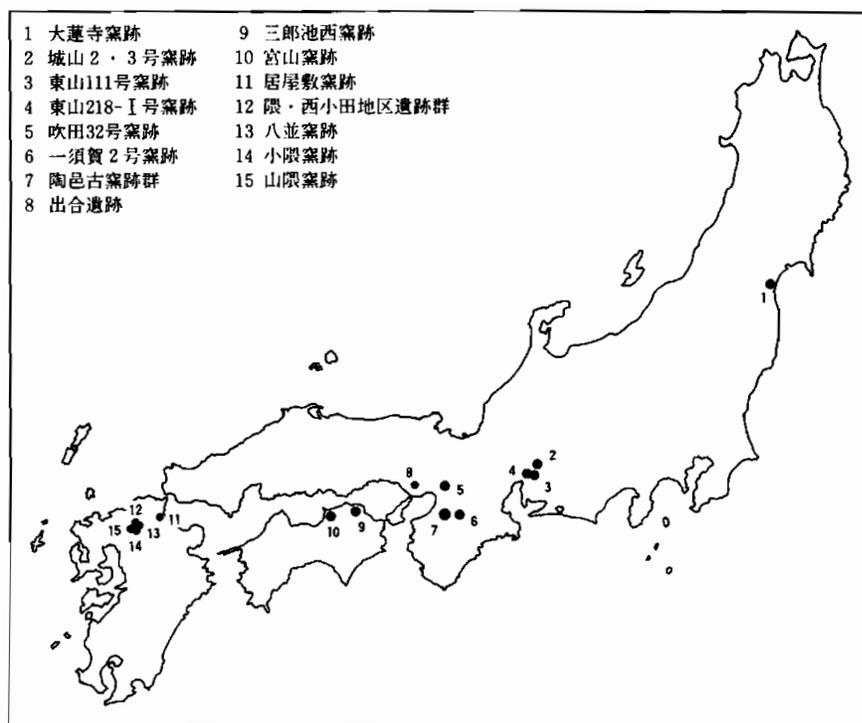


図1 初期須恵器窯跡の分布

問題点などの詳細は、前稿に記している。ご参照いただきたい。

#### 一、宮城県大蓮寺窯跡の概要

大蓮寺窯跡は宮城県仙台市宮城野区東仙台六丁目一三番地に所在している。仙台市市街地北部に東西に広がった丘陵の南側の小支丘上に存在し、緩傾斜の丘陵の先端部に焚口を南東にむけて構築されており、丘陵下は緩やかに下って平野部に連結する。この付近は、広く台の原・小田原窯跡群と総称され、八・九世紀を中心とした須恵器・瓦の生産地帯であり、陸奥国分寺・同尼寺ならびに多賀城等の須恵器・瓦の生産地として解釈が与えられている。

窯跡は半地下式の可能性をもつ窖窯で、焚口・燃焼部・煙道部はすでに削平され、焼成部のみが遺存していた。燃焼部の形態は、直線的で部分的にわずかに張り出し部がある。残存長4m、幅一・四五―一・六五、深さ〇・四mを測る。

出土遺物としては、無蓋高杯・甕・把手付碗・壺・甕・器台が確認されており、その大部分が甕・壺の破片であったという。また、完形品の甕四点と無蓋高杯の杯部一点は、以前に同所より採集されており、大蓮寺窯跡の製品としてほぼ間違いないことが確認されている。出土遺物の大半は、焼成不良のものが多く、製品の下半分が橙色になっているものや、全体に赤色に仕上がっているものもある。また、破片の

断面は、内部が淡灰色、外部（内外面）が橙色になっており、通有の須恵器と逆になっているのが特徴である。

大蓮寺窯跡の須恵器の概要は次の通りである。

**無蓋高杯** 杯部と脚部の破片がある。杯部は（図二一五）体部から底部にかけて丸みをもち、体部上半がやや直線的になって口縁部につながる。口縁部はかるく外反し、端部は丸くおさめる。体部中央には、二本の太く丸い突線で区画した中に波状文を巡らす。波状文は完全ではなく、上下端のみ明瞭に残る。この文様帯をまたぐ形で断面円形の把手が付く。底部は丁寧な回転へら削りを施す。五の透しは三方である。脚部は（図二一六）「八」の字形に低く開く安定のよいもので、五とは異なり四方透しを配する。脚部端部は太く丸く仕上げしており、端部との境界に浅い凹線が入る。

**壺** 出土した口縁部の破片の他に、四点の良好な資料があり、いずれも共通した特徴を有する。（図二一七～四）。口頸部は、逆「八」の字形に開き、口縁部との境には丸く太い稜線を付けるものと、稜線をシャープに仕上げるものがある（一）。口縁部はやや内湾して外方に開き、端部は外方につまんで凹ませているが、幾分太くするのが特徴である。口縁部外面には一条の波状文を巡らす。体部は最大径が胴部のほぼ中央部かやや上方にある、算盤玉に近い形態である。一のみは肩部に横描直線文・波状文を巡らす。他のものにはない。体

部中央部にへら削りを施すものがあり（一・二・四）、下半から底部は不定方向のへら削りによって仕上げている。器壁は一応に厚手である。

**把手付椀** 膨らみをもつ体部に、内湾して延びる口縁部を付けている（図二一七）。口縁端部は外方に向き、丸く厚めに仕上げる。体部には、上方に二本、下方に一本の凹線を入れ、その中に波状文を巡らしている。底部付近は不定方向のへら削りを施す。把手が付くが形状は不明である。また、内面下方には少範囲に横方向の磨きの痕跡を残す。色調は赤褐色である。

**壺** 逆「八」の字形に短く延びる口頸部に、肩の張る体部を付ける。口頸部の中央部には太くて丸い突線を一条巡らす。口縁端部は面をもたせるが、中央部がくぼんでいる。体部外面は平行叩き目を残し、内面は丁寧にすり消している（図二一八）。

**壺** 小片のため全容はつかめないが、口頸部はいずれも外反して延び（図二一八～一〇）、八のみがさらに強く外方に折れる。口縁部の下には一条の凸帯を付け、その下に波状文を巡らす。一〇はさらに横描直線文を付ける。また、本稿では掲載していないが、その下方にも一条の凸帯を付け、その下方に波状文を巡らす例もある。凸帯は太いが、ややシャープに仕上げるものと、太く鈍いものの二者がある。口縁端部は一応に外面に面をもたせて平坦にするが、八・九はかなりシャープな仕上げとなる。

甕および壺の体部片は、平行叩き目を残し、一部のものはその上にナデによる螺旋（平行）文を巡らすものがあるのが特徴である。内面は丁寧なナデ消しを施す。

**器台** いずれも高杯形器台である。深目の杯部を有し、底部から丸みもちながら延びて、口縁部が緩く外反する。杯部上半には、二本一組の凸帯を二条配し、その中と上方の口縁部にかけて波状文を巡らしている。二条の波状文を配するものもあるが、ほとんどが一条である。波状文は概して丁寧に施す。凸帯は太く丸く作り出し、口縁端部は甕と同様に面をもたせるが、端面はわずかに凹む。杯部外面には平行叩き目が残り、内面は丁寧なナデ消す。脚部片は不明である。

その他、甕または器台と考えられる破片の外面に、櫛描直線文と波状文を連続して施しているものがある。他に類例をみないものである。

こうした大蓮寺窯跡の遺構と遺物の報告、ならびに東北地方の須恵器生産と初期須恵器の様相については、渡邊泰伸氏が詳細に検討している<sup>3)</sup>。それによれば、大蓮寺窯跡はTK二一六型式（ON四六段階）に属し、畿内における初期須恵器編年と対比出来るとする。そして、その後に続く窯として、仙台市金山窯跡、埴輪窯の宮沢窯跡、および、福島県泉崎窯跡があるとす。また、大蓮寺窯跡の場合、甕の外面にナデによる螺旋文を巡らすのが特徴で、これは大蓮寺窯跡をはじめとして、福島県泉崎窯跡や多量の初期須恵器を出土した福島県南山田遺

跡にも見られるとして、この地方の須恵器の系譜を考える場合、同様な特徴を有する東海地方の東山窯跡群や埼玉県桜山窯跡群を考慮する必要性を説いている。

一方、大蓮寺窯跡の系譜については、中村浩氏が詳細に検討している。氏は、大蓮寺窯跡の遺物の観察を通して、陶邑窯の形態の変遷の中で時期的な位置付けを行っている。それはおおむね陶邑窯における「I型式（二〜三段階）」になるとしながらも、系譜に関しては「大蓮寺窯の須恵器生産技術が直接畿内からもたらされたものであるという確証は比較的少ない。いいかえれば、直接的に朝鮮半島から伝えられた可能性も捨てきれないものがある<sup>4)</sup>」としている。また、その後の論及でも、「少なくとも陶邑窯とは異なる系譜に連なるものであることは想像される。とくに陶邑窯と異なる意匠の叩き目の存在は留意すべきであろう<sup>5)</sup>」として、壺・甕の外面に残る螺旋に巡るナデの手法を根拠にして、陶邑窯とは異なる系譜であることを説いている。

さらに、詳細な事象を示していないが、各地で相次いで見つかった初期須恵器の窯跡は、「おのおのの地域に渡来した、あるいは渡来させられた技術者によって生産が行われ、あるいは行わさせられた」としている。その製品は、彼らの故郷のものに近似するのは当然であり、「日本の製品の知識があればおのずと影響を受けることになり、また発注者から要望されれば当然それに沿うだけの技術的水準にはあった<sup>6)</sup>」として、いわゆる地方窯の成立を「多系譜」で捉えようとしている。

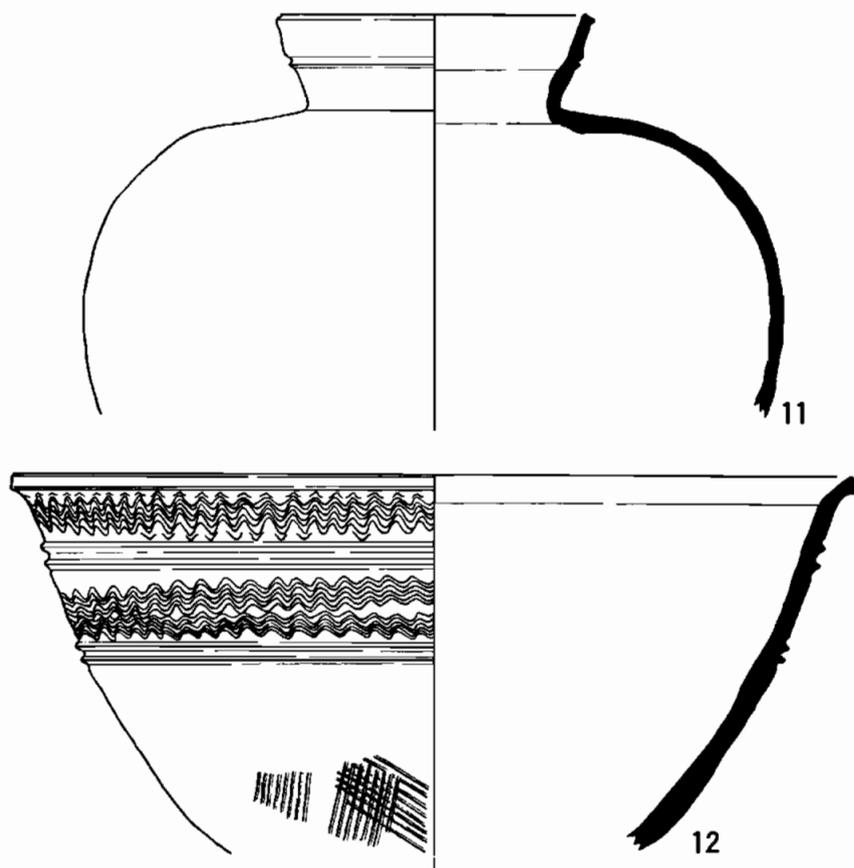
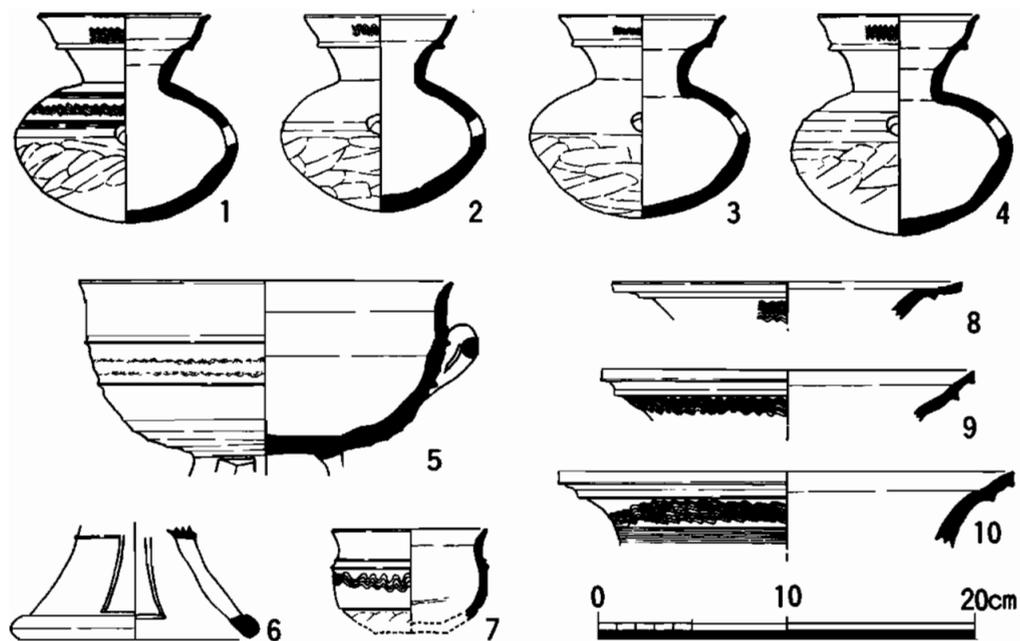


図2 大蓮寺窯跡の須恵器

る。

また、斉藤孝正氏も同様に、凹線文との関係から、愛知県東山一一号窯跡と大蓮寺窯跡との密接な関係を説き、陶邑窯とは異なる系譜の可能性を指摘している。

以上が大蓮寺窯跡に関して系譜的な問題を論じている代表的なものであるが、特に注目している点は壺・甕の外面に残る螺旋文といえよう。前出した拙稿でも述べたように、こうした工人の系譜の違いといった問題は、須恵器生産の部門に限らず、古墳時代の文物・技術の導入のあり方や、対外交渉史を組み立てる上で重要な課題といえよう。特に大蓮寺窯跡の場合、当窯跡が東北地方に存在する点は非常に重要で、渡来文化の直接的受容の有無等は明確に整理する必要があるし、そのあり方と導入経路、また在地勢力と中央権力との関係、さらには、古墳時代の社会構造の組み立てる上で、慎重に検討する必要がある。

## 二、陶邑窯との共通点

確かに大蓮寺窯跡に見られるナデによる螺旋文は、陶邑窯では顕著とはいえない。しかし、結論的に言えば、この螺旋文は近年注目を集めている大阪府大庭寺遺跡で沈線・凹線によるものが多少検出されており、大蓮寺窯跡との時間的な幅は存在するものの、あながち否定材料にならない。さらに、他の器形・技法についても共通性を認めるも

のも多い。この点では中村氏も詳細に報じ、陶邑窯との比較で時期を与えており、その大筋では筆者も異論はない。以下、氏の報文と重複する部分もあるが、陶邑窯との共通性を述べ、大蓮寺窯跡の系譜の問題について論をすすめていきたい。

大蓮寺窯跡出土の須恵器で、まず良好な資料に器台がある。杯部のみの出土であるが、深めの体部と複雑でない面をもつ口縁部は、TK二〇八型式に類似する(図三一二四)。大蓮寺窯跡の口縁部は、端面をやや凹ませているが、この特徴は、図三一二三から二四への変化段階として考えると理解できる。この点は、壺・甕の口縁部でも同様である。体部の凸帯を太く突出させる点は、TK七三からTK二一六型式までの特徴であり、手法的には共通している。次の段階であるTK二〇八型式(二四)では、完全に鋭い凸帯になる。大蓮寺窯跡はかなり太く仕上げている点から、この部分だけを取り上げればTK二一六型式に近い特徴となっている。しかし、全体的には口縁部の特徴から判断して、TK二一六型式よりも新しい傾向を備えていると考えられる。

次に無蓋高杯についてみると、杯部は深めの均整のとれた形態であり、文様帯を区画する凸帯は、器台と同様に太く突出するのが特徴である。杯部が箱形に近くなる形態は、陶邑窯ではTK二〇八型式に完成するが、大蓮寺窯の場合は全体的に丸みをもつ曲線で構成される点と、凸帯の施し方がTK二〇八型式の鋭くする点から判断して、TK

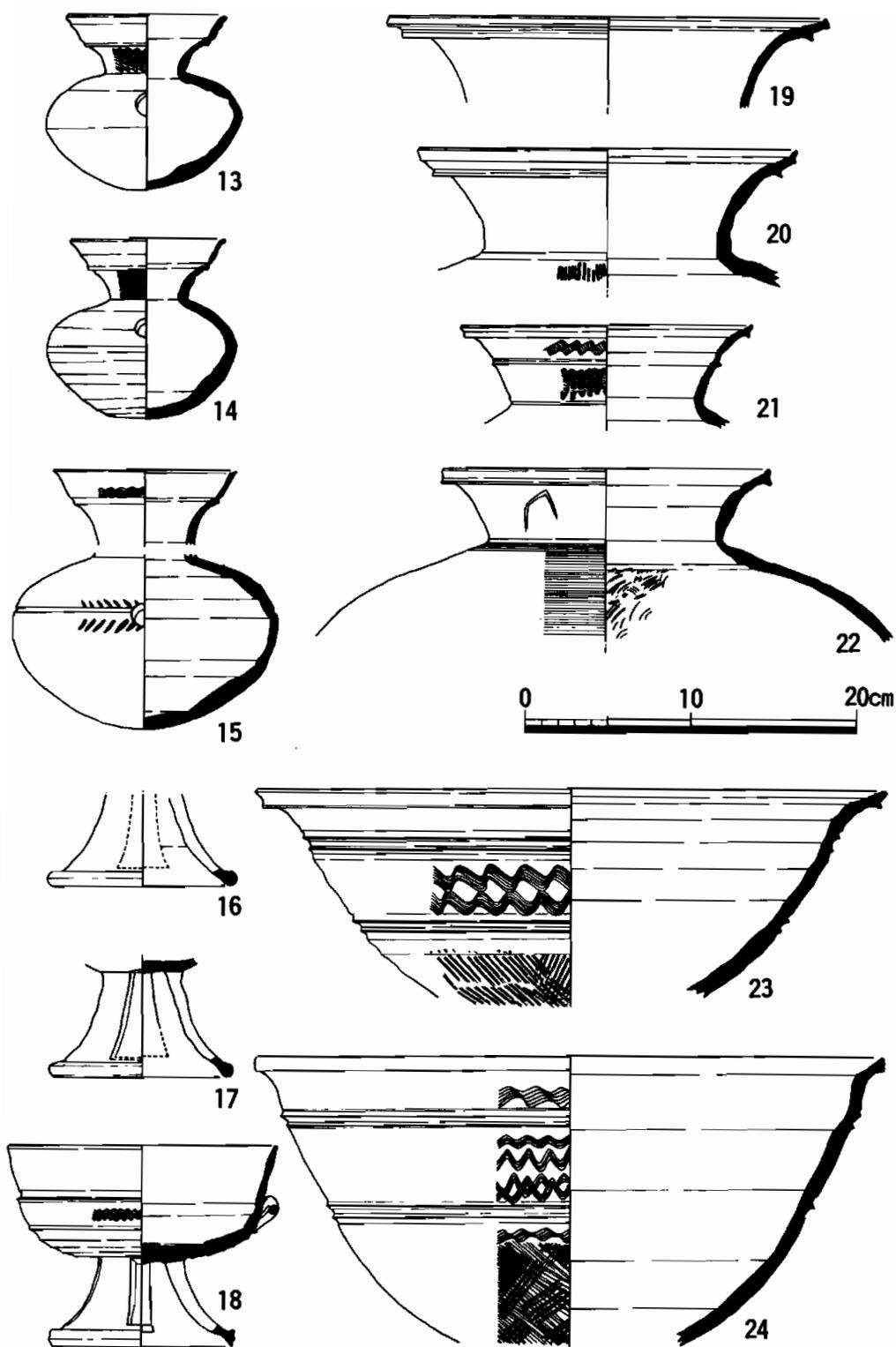


図3 陶邑窯の須恵器 (13・16・17・19・20・23-TK216, 14・21・22-ON46・15・18・24-TK208)

二〇八型式よりも先行し、TK二一六型式よりは遅らなないと考えられる。脚部の端部を玉縁状に、丸く仕上げる手法は、TK二一六・二〇八両型式にあり、かなり高い類似性をもつ。また、大蓮寺窯跡の脚部の透しは、脚部片の痕跡では(六)四方透かしとなるが、杯部(五)の在り方では三方になり、TK二一六型式よりも新しい傾向をもつといえよう。

甕は、大蓮寺窯の場合、口縁端部に面をもたせ、端部のやや下方に凸帯が巡る。TK二一六型式でも同様な特徴を有するものもあるが(一九・二〇)、明瞭な面を作り出すのはTK二〇八型式から顕著になってくる。大蓮寺窯跡の八・九はシャープに面を作る特徴をもち、TK二〇八型式に共通する。また、凸帯も器台・高杯と同様に太く突出するものと、口縁端部に見られたシャープさをそなえるものの二者があるが、TK二〇八型式よりはシャープさに欠ける点から、前段階の可能性が高い。

甕についてみよう。完形品の甕は直接の発掘品ではないが、特徴的には調査出土品と手法・焼成の点で類似している。形態的には「玉縁」形の体部に口頸部をつける。初期の甕は頸部がよくしまり、口縁部が肥大せずにおさまるのに対して、新しくなると口頸部が徐々に広がっていく傾向がある。TK二〇八型式(一五)では、肩部の張りがかなりきつくなるが、前段階ではなで肩状に仕上げる。一四の肩部・胴部とも張らない形態にかなり類似する。口縁部と頸部を分ける稜線およ

び口縁端部は、太く鈍くするものと、やや鋭く仕上げるものの二者があるが、TK二〇八型式よりもシャープさがない点は、他の器形と同様にTK二〇八型式までは下がらず、その前段階になる可能性が強い。壺については、両者を比較する良好な資料を提示できない。しかし、量的には少ないものの、この器形自体は陶邑窯にも存在している。口縁端部・稜線の特徴は甕類に準じており、TK二一六型式からTK二〇八型式にかけての特徴と共通する。

### 三、大蓮寺窯跡の位置付け

大蓮寺窯跡の特徴としては、甕・器台に見られるように、口縁端部に面をもつものが殆どであること。凸帯・稜線は太くて鈍く、よく突出する古相のものが主流である一方、明確にシャープに仕上げるものも存在し、陶邑窯での古相と新相の手法の特徴が共存していることである。こうした点および形態上の特徴は、多少部位ごとにおいて差があるものも存在するが、前節で述べてきたように、大蓮寺窯跡と陶邑窯とはかなりの共通性をもっていることが解る。

時期的には陶邑窯のTK二一六型式に類似し、各器形において鋭さと端部に面を構成している点を考慮すると、TK二一六型式でも新相であろう。しかし、直線的なシャープな面や、鋭く細く突出させる凸帯・稜線などのTK二〇八型式の手法の特徴はほとんどもない点、加え

て形態的な特徴から、田辺氏の言うON四六段階に当たると考えられる。この点は田辺氏も指摘しており、筆者も同様にTK二〇八型式の  
前段階（ON四六段階）で相違ないと判断する。

また、重要なことは、陶邑窯の中で変化した要素と共通していること、言い換えれば須恵器生産が日本で開始・定着した後の段階のものと類似するという点であり、この点が系譜論をいう場合には注意しなければならない。

すなわち、直接的に朝鮮半島から渡来した工人によって成立した場合には、北部九州の窯跡群や一須賀二号窯跡・吹田三三号窯跡の様に、陶邑窯での変化とは関係なく存在していなければならないのである。

この点は、前出の拙稿で詳しく述べたところであり、詳細には触れないが、日本で一定期間経過した段階のものと共通する点は、直接的に朝鮮半島に由来するものではないことは確実であろう。陶邑窯を含めた国内からの影響が強いと考えられるのである。ただし、技術的には直接渡来した工人が日本の製品を見て、あるいは在地豪族の依頼等によって製作したことも予想はできるが、形態や端部等の特徴、さらに文様・技法等のあらゆる面に至るまで、すべての要素を満たした点については疑問が残る。また、そうした製品の中にも、故郷の製品・手法が含まれる可能性も充分あり、現段階では肯定的な立場はとれない。

もちろんすべての面で共通している訳ではない。甕・器台などのよ

うに、口縁端部に面を作る新相の傾向がある一方で、TK七三型式からあるような、太く鈍く突出する凸帯を備えている現象も見られるが、総合的な解釈においては矛盾しない。特に大蓮寺窯跡の場合は、甕の外面に見られた螺旋状のナデの文様が陶邑窯には無い特徴として注目されており、東海地方・東山窯跡群と深い関係にあることが言われている。その点は共通する要素として必ずしも肯定できないが、前述したように、近年陶邑窯内の集落・関連遺跡として注目を集めている大庭寺遺跡からは、螺旋状に巡らした凹線文が検出されており、陶邑窯の中でもこうした手法が初期から存在したことは明確である。ただし、大蓮寺窯との連続性については問題が残る。しかし、後の段階でも主流とはいえないが、甕の外面に櫛描文を螺旋状に巡らす例が存在していることを考えあわせると、手法的には広範囲に残っていたと考えられよう。

また、器台に見られる形態の特徴は、必ずしも東海地方との関係で論ずることは出来ない。それは、東山一一一窯跡の器台が口縁部を極端に直線的に屈曲させている点に対して、大蓮寺窯跡の場合ならかに湾曲させている点である。むしろ前述した、陶邑窯との比較・共通性の中で解釈するのが妥当と考えられるのである。

したがって、大蓮寺窯跡の成立が、陶邑窯とは系譜を異にするという見解は、十分に検討の余地がある。大蓮寺窯跡に遡る窯跡が今後検出される可能性があるにせよ、現段階での大蓮寺窯跡の解釈としては、

陶邑窯での変遷の上で理解できる点とその共通性から、陶邑窯との関係が深いと判断せざるをえないのである。仮に、陶邑窯以外の国内の系譜を考えても、東海地方の螺旋状の文様のみでは、積極的な根拠にはならないと考える。

## お わ り に

これまで述べてきた様に、小稿では前出の拙稿に引き続いて、大蓮寺窯跡を中心に初期須恵器窯の系譜の問題について考えた。特に、大蓮寺窯跡の須恵器が、陶邑窯の変遷の流れの中で正確に据えられ、共通性を認めることから、従来言われていた陶邑窯と系譜を異にするという見解を否定した。東海地方との関係についても、螺旋状の文様は多少関連するにしても、その手法は初期の陶邑窯でも存在していること、また、その他の器形、とりわけ器台・處においては東海地方との共通性は否定され、逆に陶邑窯との共通性の方がより信頼度が高いと判断するに至った。

初期須恵器の段階の窯跡は、近年数多く確認されている。その中には、異系譜のものも含まれるが、いわゆる「多元論」として、すべてが総括されるものではない。また、今後他地域において、初期須恵器の段階の窯跡が数多く発見されることは十分に予想できるが、この時点においても同様の注意を要する。小稿はその点を再度確認して、

陶邑窯を含めた須恵器の共通点・組成を整理・検討することの重要性を改めて強調しておきたい。

陶邑窯の成立については、各支谷毎の須恵器に多少の形態差を認めることから、各所で系譜の違う工人によって、分散的に生産が開始したとする見解が出されている。また、こうした見解と連動して、地方窯の生産のほとんどが、錯綜してそれぞれ違った系譜の元で生産を開始したとの意見もある<sup>⑧</sup>。後者の場合は、小稿で見たとように必ずしも、すべてに妥当性をもたすことは到底できない。

さらに、陶邑窯の成立については、器形毎に多少の系譜を違えていたとの説も出されており、広い地域の渡来工人が多人数で集団を形成して生産に従事し、器形毎に系譜が異なると言うものである<sup>⑨</sup>。そうすると、各支谷毎に複雑な混沌とした状況が出来上がってくる。現状では必ずしもそうした状況が明瞭に判断できるとは考えられない。

こうした陶邑窯の解釈は、現在調査中の大庭寺遺跡が重要な鍵を握っている。TK七三号窯の須恵器よりも、先行するとみられる一群の須恵器が多量に出土しており、付近に窯跡の存在することが確実視されている<sup>⑩</sup>。さらに、渡来人が製作・使用したと考えられる軟質系土器が同時に多量に出土しており、直接的に渡来した須恵器工人集団の生産と生活の痕跡を残している。こういった大庭寺遺跡での初期の様相と、TK七三号窯あるいは上代窯、濁り池窯、さらには一須賀二号窯・

吹田三三号窯跡などの資料との比較・検討が急務になってきた。大庭寺遺跡からTK七三号窯・上代窯・濁り池窯等へ移る過程や経路・地理的条件の確認と、こうした窯跡の系譜の是非の諸問題とは切り放して論じることはできない。将来的に提出される調査成果・検討成果を踏まえて、陶邑窯の成立については考えていきたい。

〔付記〕小稿をまとめるにあたり、大蓮寺窯跡の資料は渡邊泰伸・結城慎一氏のご好意により見学させていただき、有益なご助言をいただきました。記して謝意を申し上げます。

#### 註

- (1) 田辺昭三「須恵器の誕生」『日本美術工藝』三九〇 一九七二年
- (2) 植野浩三「初期須恵器窯の解釈をめぐって」『文化財学報』第六集 奈良大学文学部文化財学科 一九八八年。
- (3) 渡邊泰伸ほか「陸奥国官窯跡群」(「古窯跡研究会研究報告」第四冊 古窯跡研究会) 一九七六年。 渡邊泰伸「東北古墳時代須恵器の様相と編年―須恵器編年試論―」『考古学雑誌』第六五巻第四号 一九八〇年。 同「東北須恵器出現期の様相」『考古ジャーナル』三一六 一九九〇年。
- (4) 中村 浩「初期須恵器生産の系譜―宮城県仙台市所在大蓮寺窯について―」『大谷女子大学紀要』第一五号 一九八〇年。
- (5) 中村 浩「須恵器生産の諸段階―地方窯成立に関する一試考―」『考古学雑誌』第六七巻第一号 一九八二年。
- (6) 中村 浩「近畿地方の須恵器と陶質土器」(「陶質土器の国際交流」柏書房) 一九八九年。
- (7) 齊藤孝正「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部論集』LXXXVI 史学二九 一九八三年。
- (8) 田辺昭三「須恵器大成」角川書店 一九八二年。
- (9) 中村 浩 前掲註(5)。
- (10) 酒井清治「陶質土器と初期須恵器」『季刊 考古学』第三三三号 一九九〇年。
- (11) 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会によって調査中。富加見泰彦・土井和幸・奥 和之・岡戸哲紀氏のご教示による。記して謝意を申し上げます。